

郷土資料館講座『海の森クラブ』の活動について

* 高山 優美

1. はじめに

大磯町郷土資料館では、2010年度より館主催の講座として「海の森クラブ」を開催している。開始から5年が経過し、貴重なデータが集まってきている。これまでの調査結果については、あらためて機会を設け紹介したいと考えており、本稿では、活動開始の趣旨とともにこれまでの活動概要を紹介する。

大磯町の海藻の調査研究については、1996年発行の『大磯町史 9 別冊 自然』において、高橋昭善氏（以下、高橋氏と記載）が緑藻9種、褐藻22種、紅藻57種の合計88種を記録し、まとめている。また、2004年発行の『相模湾の海藻』では、松浦正郎氏（以下、松浦氏と記載）が緑藻11種、褐藻15種、紅藻89種、合計115種をまとめている。以上の2冊の海藻目録はあるが、近年、大磯町における海藻の調査は行なわれていない。そこで、現状の藻類相の把握を目的として、「海の森クラブ」の活動を開始した。

「海の森クラブ」参加者募集の周知は『広報おおいそ』や直接、海藻に興味をお持ちの方に声掛けをして進めた。日ごろから海辺の自然に親しんでいる町外のダイバーや海藻おしばづくりを趣味にしている人たちから応募があったが、町内在住者からはなかった。当館の自然分野のワークショップでは、他に「草と木の調査（現在、大磯自然観察会に名称変更）」の活動があり、町内在住の方々が多く参加している。そのため自然に興味を持っている方が多いと考え、町内在住の方々に対しても反響があるだろうと思っていたが、予測に反した出発であった。

参加者が少ない理由を考えてみたところ、海の生き物観察会では、岩肌につくヒザラガイや隙間に隠れているカニやエビ、潮溜まりに泳ぐ魚など動く生

物に目が向く。ビーチコーミングにおいては、貝殻やシーグラス、流木など、各々興味のある物や漂着物でもきれいそうな物に目が向く。海藻は普段、食卓に並ぶが、実際に海岸で観察する機会は少ない。私自身、磯観察会で海藻の解説をした時に、「これ海藻なんですか？」という声をよく耳にする。食材として見られても、海の植物という認識は薄いように感じる。海藻に関心を持っていただきたいということも、活動開始の一因といえる。また、調査活動とは別に一般の方でも海藻観察に親しめるように、室内で行なう海藻おしばづくりを並行して実施し、普及に努めることにした。

2. 活動内容について

2-1. 定点観察

定期的な海藻の観察を行なっている。海藻は、通年観察できる種類もあるが、多くは低水温の時期に生長が見られる。生長した海藻は、夏に枯れ岩肌から剥がれ、浜辺に漂着するものが多い。このため、活動のサイクルは海藻の生長に合わせて11月から翌年7月までとした。

高橋氏は海藻の分布調査の実施に際し、方形枠を使って垂直及び水平分布の状況をまとめている。同様の方法で進めようとするも照ヶ崎海岸の岩礁は、満潮時はほぼ全体が水没し、秋から早春にかけては、大潮の干潮時でも岩場まで渡ることが難しい。春から初夏に掛けての大潮の干潮時でも奥の岩場まで渡ることがやっつである。

試行錯誤の活動の中で、海藻を専門的に調査研究している相模湾海藻調査会の会員による方形枠を使っての海藻群落測定調査を見学する機会を得た。記録の精度という点で、感心したが、ワークショップの活動時間、また、一般の方の調査に対する親しみやすさという点で、いつでも誰でも気軽にできる目視で記録に残すことにした。



図1 海藻観察の様子



図2 海藻おしばづくりの実施の様子

(* 当館臨時職員・自然観察指導員)

2-2. 海藻おしばづくり

海藻は、海環境にとって重要な役割をしていることと伝えているために、一般の方々を対象に、海藻おしばづくりを実施することにした。実施にあたっては、海藻おしば協会に全面的にご協力いただいた。

3. 各年度の活動概要

3-1. 2010 年度の活動概要

『広報おおいそ』で参加者を募るとともに、県内の海藻おしば協会員に呼びかけた。町外在住者がほとんどであったが、6 人のメンバーで活動を開始した。他の郷土資料館のワークショップの活動日を鑑み、定例の活動日を平日とした。毎回、参加者全員が参加できるとは限らず、情報の共有を図るため『海の森通信』を発行した（図3 参照）。

5 月から7月の第3木曜日に、照ヶ崎海岸の磯観察、漂着海藻の観察を実施するとともに、同地で採集した海藻のおしば標本づくりを行なった。海藻があまり見られなくなる8月、9月は、体調を考慮し、活動を休止とした。10月以降は翌年3月に予定されていた企画展「大磯町の海辺の自然」の準備にあてた。海藻に関する資料が十分に揃っていない中、企画展の準備を進めることにしたのは、将来、海藻をテーマに企画展を開催する際、こういった手順で、こういった資料が必要かを把握することを目的としたことによる。企画展「大磯町の海辺の自然」における海藻の展示スペースは企画展示室の一部であったが、小テーマの構想、資料抽出、展示資料の制作の後、標本24種の列品を行なった。

企画展の来館者アンケートの結果では、「海藻の種類数が多いことに驚いた」「海藻を初めて綺麗だと感じた」「海藻おしばを作ってみたい」という意見が多く活動の励みになった。

3-2. 2011 年度の活動概要

活動日は毎月第3木曜日とした。2年目は、まず大磯町の海岸全域を巡回し、海藻漂着状況の掌握に努めた。状況が分かってからは、照ヶ崎海岸を中心



図3. 海の森通信

に定点観察を行なうとともに採集した海藻の標本づくりを進めた。10月には海藻観察の普及のため、海藻おしばづくり体験講座を開催した。『広報おおいそ』と郷土資料館のポスター掲出により、参加者を募り、参加人数は10人（大人4人、子ども6人）だった。実施内容は、おしばづくりという作品づくりだけではなく、大磯町の海藻の状況や海の環境保全について解説し、あわせて当ワークショップのPRを図った。参加者は海藻をテーマにした活動に初めて参加される方ばかりであったが、一様に楽しまれている様子が見えられた。

3-3. 2012 年度の活動概要

3年目に入り、定点観察する中で、新しい発見がいくつもあった。特に海藻の生長は想像以上に早いことが分かった。

活動日は、これまでと同様に毎月第3木曜日とした。より詳細な調査を進めるべく、岩礁の表面で見られる海藻をくまなく記録を取るようにしたが、活動日が満潮時間と重なることもあった。図4と図5



図4. 干潮時の照ヶ崎の岩場



図5. 満潮時の照ヶ崎の岩場

表 1. 2013 年度の調査結果（一部抜粋）

	名前	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1	マルバアマノリ	○	○	△								△	○
2	ヒラアオノリ	○										△	△
3	ボタンアオサ	○	○	△		△	△					△	○
4	ヒトエグサ	○	○	○	△							△	○
5	アナアオサ	○	○	○	○							△	○
6	ピリヒバ	○	○	○	○	○	○					○	○
7	ウシケノリ	○	○	△	△								
8	ハバノリ	○	○	△	△							△	
9	ツヤナシシオグサ(?)	○		△									
10	ヒジキ	○	○	○	○	○	△					○	○
11	シワノカワ	○	○	○	○	△	△					○	
12	カヤモノリ	○	○	△								△	△
13	ワカメ（幼体～成体）		○	○	△	漂	○						
14	ウミウチワ	○	○	○	○	○	○					○	
15	フシツナギ			漂	○	○	△						
16	ヒラムカデ	○	○	○	○	○	△						
17	イソダンツウ		○	○	○	○	△					△	
18	コメノリ				○	○	△						
19	ツノマタ		△	△	○	○	△						
20	クロソヅ		○	○	○	○	△						
21	エチゴカニノテ		○	○	○	○	○						
22	オオブサ				○	○	△					漂	漂
23	カイノリ	○	○	○	○	○	△						
24	アラメ		△	△	漂	漂	○					漂	漂
25	ツルツル	△	○	○	○	漂						△	△
26	フクロノリ				△		△						
27	ヒメテングサ				△	△	△						
28	ヒラクサ				△	△	△						
29	アカモク		漂	漂	○	○	○						
30	イシゲ	○	○	○	○	○	△					△	
31	トサカマツ		△		△	○	○					△	
32	フトジュズモ		△	漂	漂	○	○						
33	ツノムカデ		△	—	△	○	○						
34	オオバツノマタ		△	—	△	○	○						
35	ショウジョウケノリ		△	○									

表の見方

○：多い △：少ない 漂：漂着海藻あり

は干潮時と満潮時の照ヶ崎海岸の様子である。満潮時は、地先の磯にわたることが難しい。その場合は漂着している海藻のみの観察になった。これまでと同じ方法で調査を進めていたが、年度途中で参加者と調査方法について、意見交換をし、活動日を潮汐表の潮位が低い日に設定することにした。不定期開催となったため、定例会に参加できる人数が少なくなったが、データ収集を優先させて活動を進めた。時期によって変化する海藻の様子を記入できるよう記録用紙を作成した。

海藻おしばづくりは、2011年度と同様に10月に開催した。前年度に比べ、参加者人数が増え15人であった。子供から大人まで幅広い年齢層に対し、体験学習をすることができた。

3-4. 2013年度の活動概要

4年目になり、新たな参加申込みがあり、参加人数が増えた。

継続参加している参加者は、前年同時期に観察できていた海藻が生長していないこと、種類によっては逆に前年より多く見られることなど、経験を振り返りながら観察ができるようになった。地道な調査活動を進めるうえでの楽しみ方をマスターされたようである。

また、2015年度の自然分野の企画展として、海藻をテーマとした展示構想を練り始めたことで、より目標が明確となり、更に知識を深めようとする気運が高まった。そうしたことから、同年よりワークショップ参加者それぞれが、興味を持った海藻の生息場所、特徴、食材であれば利用方法などを調べ、『海の森通信』に掲載するようになった。

継続的に開催している海藻おしばづくりでは、開催時期を小学生の夏休みの自由研究に活用できるように夏休み期間に変更した。10月開催より大幅に参加者が増え、70人の参加があった。夏休み期間中で、自由研究に活用できるということもあり、町内の親子参加も多かった。終了後の参加者アンケートでは「海をよごすと海藻が消えてしまうので、あらためて海を大切にしないといけないと思った。」「海の近くに住んでいるので自然の大切さを学べて良かつ

た。」「とても楽しかった。来年も参加したい。」など企画に対する好意的な意見が多く、指導にあたったワークショップ参加者の励みになり、活動意欲が高まる結果になった。

4. 今後の活動のまとめ

22年度からスタートした「海の森クラブ」は、現在も模索しながら活動を継続している。参加人数は少人数であるが、同じ場所を定期的に観察することで、参加者は海藻に関する知識の積み重ね、また、新しい発見を楽しんでいる。

現在、目録作成を進めているが、海藻の同定の難しさに直面している。海藻は同じ遺伝子であっても地域や場所によって形が変わると言われている。本来正確な目録を作成するためには、顕微鏡や遺伝子解析レベルが求められるが、広く一般の人たちでも、楽しみながら行なえる調査活動を今後も進めたいと考えている。

現在の「海の森クラブ」参加者は、日頃から海辺の自然に親しんでいる人たちであるが、海藻おしばづくりのように、幅広い年齢層の方に興味をもって参加していただける環境づくりを考えていきたい。

現在の観察記録は、過去に報告されている高橋氏、松浦氏の種類数に劣るが、52種類の海藻を記録している。同定にあたっては図鑑や海藻関連の勉強会に参加することで知識を深めてきた。大磯町史で高橋氏の記述によると、谷口(1987)の調査では、大磯照ヶ崎海岸の海藻相は「カイノリーネジモク群が形成される」とある。現在では、毎年岩を覆い尽くすほどのヒジキ群、アラメ群が観察できている。これまでの藻類相の推移は分からないが、今後、活動を地道に続けることで、海岸環境の変化を示す根拠資料を残せるものと考えている。

5. 参考文献

- 高橋昭善(1996)「4 海藻」『大磯町史9 別編 自然』大磯町
- 谷口森俊(1987)『極東の海藻植生学的研究』井上書店
- 松浦正郎(2004)『相模湾の海藻』箱根博物館